古典授業の現状における問題点とその改善策を考える

――日本の伝統文化を世界に発信するために――

中條　敦仁

1．はじめに

中学・高等学校における「古典」の扱いが難しくなってきている。国語科教員は、それぞれに工夫をし、地道に「古典教育」を進めている。しかし、現代の児童・生徒（以下、児童・生徒を合わせた総称として「生徒」という表記を使用する）は、現代日本社会全体の傾向に強く影響されているためか、特に「現代・未来」志向が強く、過去に対する興味・関心が薄い。このままでは、教員の努力もむなしく、「古典」はますます嫌われ者となっていく。

だからといって、「古典」の授業を一切おこなわず、「現代文」の授業だけをおこなえばいいかというと、そうは言えない。古典文学作品の中には、日本及び周辺国の文化・歴史、伝統、生活・風俗・習慣などの人間の営みに関することなどが満載である。言うならば、「日本人の営みの宝庫」であり、ここから、現代に生きる我々が学ぶべ

きことは多い。また、国際化が進み、日本文化に興味を持つ外国の方がますます増え、その人たちが興味、関心を寄せるのは、例えば、浮世絵などの伝統絵画、能・歌舞伎・狂言などの伝統芸能、舞妓の姿・十二単など服飾などの古典に描かれた世界である。近年、日本古典作品を対象に文学研究をおこなう外国人研究者や留学生も増えている。古典作品は外国語に翻訳され、海外で読まれ、日本の古典を扱う大学の講義もあるとも聞く。稿者の考える国際化とは、単にことばを話してコミュニケーションが取れればいいというものでなく、自国の文化を他国に発信し、互いに認め合い、競い合うものである。そのためには、まず日本人として我が国の過去、特に古典の世界を知り、海外に発信できるだけの最低限の知識・教養を備えることが必要である。この観点から、やはり、「古典教育」は重要である。

では、「古典」が、嫌われ者にならないためには、どうすればいいのか。それを考える手がかりを得るために、生徒・学生に対して古典授業に関するアンケートおこなった。その結果を分析し、生徒が古典の授業に何を求めているのかを明らかにし、新学習指導要領における古典の扱い方、小・中・高等学校の現状、今後さらに重要視されていくと思われる小・中・高の連携を見据え、旧学習指導要領から新学習指導要領への移行に関する問題点とその問題を解決し授業改善をしていくためのヒントや考え方を提示してみたい。

2．生徒・学生の古典の授業に対する意識

では、実際に「古典」の授業を受けてきた生徒・学生（アンケート対象者は高校生・短大生・大学生）は、古典の授業に対してどのような意識をもっているのであろうか。

稿者は、生徒・学生の古典授業に対する意識調査をするために、平成一七（二〇〇五）年と平成二〇（二〇〇八）年に「学校教育における古典の授業に関するアンケート」を実施した。一回目の調査対象者は高校三年生（一〇六名）、短期大学二回生（二九名）、大学二・三・四回生（一四名）、二回目は高校生三年生（六二名）である。そのアンケート内容は次の通りである。

1．小学校における古典教育は必要だと思いますか。→　A．必要　　B．不必要
　＋なぜ、必要、あるいは不必要と思うのですか。（自由記述）

2．中学校における古典教育は必要だと思いますか。→　A．必要　　B．不必要
　＋なぜ、必要、あるいは不必要と思うのですか。（自由記述）

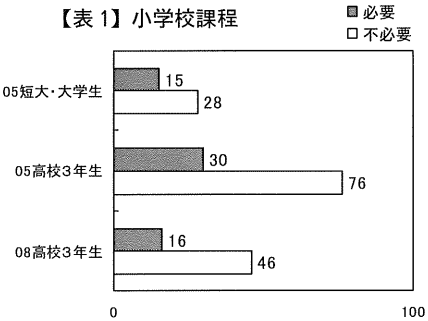
3．高等学校における古典教育は必要だと思いますか。→　A．必要　　B．不必要
　＋なぜ、必要、あるいは不必要と思うのですか。（自由記述）

4．古典文学作品は、我々人間にとって、意味のあるものだと思いますか。

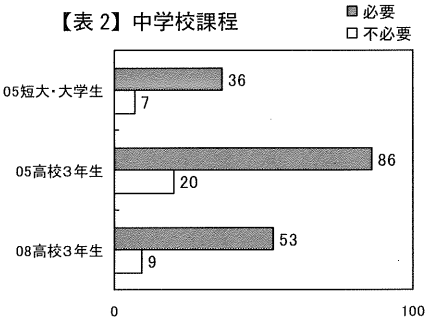
＋なぜ、思う、あるいは思わないのですか。（自由記述）

↓ A・思う　B・思わない

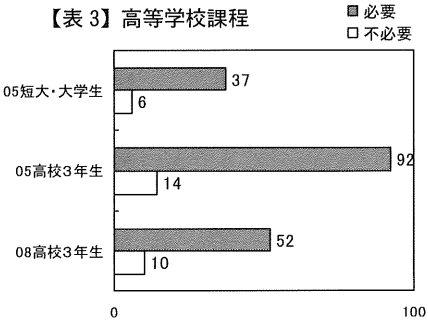
【表 1】小学校課程



【表 2】中学校課程



【表 3】高等学校課程



小学校・中学校・高等学校の各課程における古典教育の必要・不必要の質問に対する結果は、右の【表1】～【表3】の通りである。高校生の分母が他に比べて多いのであるが、それは、まさに高等学校課程を終えようとする高校生の意識をより多く調査することにより、教育現場の現状把握と問題点、さらに今後の課題がより鮮明になると考えたためである。

2-1．小学校課程における古典授業について

【表1】は、小学校課程において古典授業が必要か不必要かを問うた結果である。不必要の数が多く、生徒・学生は、小学校課程のおける古典教育の必要性は感じていない。では、この結果をどうとらえればよいであろうか。そのことを考えるために、「なぜ、必要、あるいは不必要と思うのですか。」の項目の小学校課程の結果のいくつかを示し、結果の背景を考えたい。

＊小学校課程の古典授業の必要、あるいは不必要の理由

a．必要と考える理由

○高校に入って初めて古典を学ぶよりも、小学生のうちに簡単な語句や用法を学んでおけば、早く古典に馴染めるから。（高校生）

○実際高校3年間だけでは古典の基礎が身についていないと思うので、小さい頃から徐々に勉強すれば高校生になってから少しは楽だとおもうから。（高校生）

○小さい時から古文を勉強させ、興味を持たせたら、高校生になっても楽しく学ぶことができるから。（高校生）

○少しずつやさしい文から勉強していき、歴史も理解させつつ、話しのおもしろさを伝えるべきだと思うから。（高校生）

○古文・漢文には大切な教訓や昔の人々の生活が詰まっています。よりよく生きていくためにも、小さい頃から、昔の多くの人の生き様を知っておくのも必要だと思うから。（短大生）

○小学校時に漢詩や古文のリズムのあるものに触れ、実際に声に出して読むことで日本語の美しさを学ぶことができるから。（大学生）

b．不必要と考える理由

○高校や中学では古典のような専門的分野があってほしいけど、小学校では少し難しいような気がする。（高校生）

○古典の授業をやるより、英会話の授業を取り入れるべきである。これからの時代は英語を話せないとだめだから。（高校生）

○小学生には古典の文法は難しいように思えるから。（高校生）

○まずは古典を学ぶ前に、現代文をしっかりと学んで、きちんとした読み書き、会話ができるようにした方がいいと思うから。（高校生）

○小学校ではもっと日本語を楽しめるような授業でよいと思う。古典は勉強感が強いから。（短大生）

○ただでさえ授業数が減っている今、現代の日本語もきちんと話せていない人が増えているのに、古典もやったら日本語がよけいにおかしくなるだろうから。（大学生）

右に意見の一部を示したが、「b．不必要と考える理由」を見ると、「小学生に古典は難しすぎる」というものと「小学校課程でまずは現代文の力をつけるべき」というものがみられ、不必要とする全データを見渡しても、ほぼどちらかの理由に属す。小・中・高等学校課程を経てきた生徒・学生からみると、小学生はまず現代のことばを理解することが最優先であり、難しすぎる古典は不必要と考えているようである。ただ、問題は、不必要としている者にとっての「古典」の内容である。その内容は、前掲の不必要の理由の中の「小学生には古典の文法は難しいように思えるから」とあるように、高等学校課程における古典授業の内容を想定しているようである。当然のことながら、高等学校課程の内容の授業を小学生におこなっても難しく理解できないであろう。

2-2．なぜ、中学校・高等学校課程における古典授業は必要と考えられているのか

次に【表2】【表3】をみると、ほぼ同じような数値を示し、生徒・学生は中学・高等学校課程での古典授業はおおむね必要と考えている。そこで、全データのうち、中学校・高校で「必要と考える理由」に書かれた意見をもとに、なぜ必要と考えているのかをみる。煩雑になるので、実際の意見一つ一つの掲出は避け、稿者が内容をおおよそ分類した結果（上位のもの）のみを示す。

＊中学校課程で必要と考える理由

○小学生よりも知識が増え、古典も理解できるようになっているから。

○高校でより理解するための古典の基礎的知識を学ぶにはいい時期だから。
○感受性が強い年齢だから、古典の内容から人間を知り、豊かな心を育てるにはいい時期だから。
○高校受験に必要だから。

＊高等学校課程で必要と考える理由

○大学受験に必要だから。
○高校生の時期は様々なものに触れ、様々なことを知る時期だから。
○高校はある程度専門的なことを学ぶ場所だから。
○一般教養として知っておく必要があるから。

中学・高等学校課程における古典授業が必要とする上位意見は右の通りである。中学校課程では、年齢的・時期的理由が多く、受験のためという意見は少ない。それに対して高等学校課程では、受験のためという意見が圧倒的に多く、古典に親しみ、過去の日本を知るというような意見は少ない。

このことから、中学校では「教養的な科目」として、高等学校では「受験科目の一つ」として必要性を感じていることがわかる。

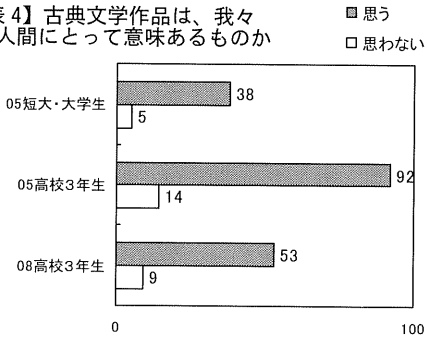
両課程とも必要とは感じているものの、その質は大きく違う。特に気になることは、高等学校課程における古典の位置づけである。多くが受験科目としての必要を感じており、受験科目に古典が不要な生徒、あるいは興味のな

い生徒にとっては、必要のない科目という意識が強いのである。生徒にとって古典は受験科目（文法中心の暗記的科目と捉えている生徒も多い）であり、その内容や本質は二の次のようである。

2-3．アンケート項目3と4の結果のねじれ

データから、生徒にとって高等学校課程の古典授業は、受験科目の一つとして位置づける傾向にあることがわかる。しかし、その結果と、アンケート項目4「古典文学作品は、我々人間にとって、意味のあるものか」のデータとの結果にねじれがみられるのである。次にそのねじれについて述べておきたい。

【表4】古典文学作品は、我々人間にとって意味あるものか



【表4】は、アンケート項目4「古典文学作品は、我々人間にとって、意味あるものだと思いますか。」という問いに対しての結果を示したグラフである。グラフの数値は、【表2】【表3】と同じ結果を示している。

このデータからみる限り、ねじれは感じられない。しかし、「思う・思わない」の理由にねじれがみられるのである。その傾向は特に高等学校の結果において顕著である。

次に生徒・学生の書いた理由の一部を掲出する。

○昔の話や事実を学ぶことによって、今と昔の相違点に気付き、歴史の流れもわかり、伝統等にも触れることができるので、とても大切で意味あるものだと思う。（高校生）

○古典作品から学ぶことが多いから。（高校生）

○昔の作品があって今の作品があるし、その時代の背景がうかがえる。昔から学べるものは少なからずあるから。（短大生）

○過去の人たちが残した遺産なのだから読めば読むほど日本人らしくなれるのではないかと思う。（大学生）

○古典文学の中には、さまざま教えや、参考になることがたくさんある。（高校生）

○古典文学を学ぶことで日本のルーツを学ぶことができる。（高校生）

○日本の歴史の中で書かれてきたものは今と共通する部分や共通しない部分があり、時代の移り変わりがわかるような気がする。（高校生）

「思う」という全データを見渡すと、その多くは、右に示した意見のように、過去に学ぶことの大切さ、重要さを説いている。多くの生徒・学生が、このように記しているのにもかかわらず、古典授業には「過去に学ぶ大切さ・重要さ」は求めず、受験科目として位置づけている。意見の中に「受験のためにやっているだけで自分には関係なくて興味はないけど、全体的にみれば必要になってくるんじゃないかと思う」というのがあり、この意見はねじれ

現象を端的に表したものではないか。彼には、古典作品の内容は大切（中には漠然と大切なものと感じている者もいる）であるという意識はあるが、高校における古典には馴染めず、あきらめるか、受験科目として割り切って勉強するものとなっているようである。このようなねじれ現象の起こる原因の一つとして、文法事項中心とした高校古典授業があげられるであろう。文法事項中心の暗記的（読むための基礎能力として必要ではある）、受験対策的授業は、内容の全体把握がしづらく、おもしろみを感じられなくなる上、古典のもつ独特のリズムや表現を味わうことが難しくなる。このような状況では、古典は難しく、理解しがたいものとなり、受験に必要なければ、学ばなくてもいい、過去のことなどどうでもいいという発想が生まれてきてしまうのであろう。

3．旧学習指導要領と新学習指導要領の古典作品の扱い

では、平成二〇年三月告示の新学習指導要領（以下、新指導要領）では、古典がどう扱われているのか。以下、小学校、中学校、高等学校課程のそれぞれについて、旧学習指導要領（以下、旧指導要領）と新指導要領の両方を記す（以下、本文において、●は旧指導要領、○は新指導要領よりの引用であることを示す）。

①小学校課程

小学校の国語科指導の中心をなすものは、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という四つの柱をた

て、基本能力の習得については旧学習指導要領（以下、旧指導要領）から変わっていない。

旧指導要領では、「●易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむ」とあるのみで、「古典」の扱いに関する項目は特に立てられていなかった。しかし、新指導要領では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が立てられ、「古典作品」の扱いについて次のように明示している。

○一・二年生…「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」

○三・四年生…「やさしい文語調の短歌や俳句について、情景を浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」

○五・六年生…「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」

右のように、これまでなかった「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を立て、古典作品の扱いを明示したところに、過去軽視未来志向型から、伝統・文化重視未来開拓型への変更がみられ、大きな意義を感じる。

②中学校課程

中学校の国語科指導の中心をなすものは、小学校課程で習得した「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という四つの基本能力をもとに、それら能力のさらなる発展・開発である。旧指導要領では「古典」の扱いに関する項目は特に立てられておらず、「指導計画の作成と内容の取扱い」という事項の中の一部として、

●「古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心を持たせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにし、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること」

●「文学作品などの成立年代やその特徴などに触れる場合には、通史的に扱うことはしないこと」

と書かれている程度である。それに対して、新指導要領では、小学校課程を引き継ぐように「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が立てられ、「古典作品」の扱いについて次のように明示している。

○一年生…「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」「古典には様々な種類の作品があることを知ること」

○二年生…「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」

○三年生…「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」

右の三学年の目標をみると、古典の世界を知り、読んでいくための基本・素養を身につけることを主眼としてい

ることがわかる。

③高等学校課程

高等学校の国語は、「国語表現Ⅰ・Ⅱ」、「国語総合」、「現代文」、「古典」、「古典講読」と細分化され、「古典」に関しては、「国語総合」の一部と、「古典」「古典講読」として独立した一つの科目として存在している。

旧指導要領では、「国語総合」では「古典」に関することとして、「内容の取り扱い」「目標」項に次のようにある。

●国語総合…「古典と近代以降の文章との授業時数の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の態度に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること」「我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」「広い視野から国際理解を深め、日本人として自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと」

●古典…「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」

●古典講読…「古典としての古文と漢文を読むことによって、我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」

これに対して、新指導要領では、国語総合では、小・中学校課程と同じように「伝統的な言語文化と国語の特質

に関する事項」が立てられ、さらに古典を「古典A」「古典B」にわけ、次のような目標を立てている。

○国語総合…「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」「文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること」

○古典A…「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」

○古典B「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」

高等学校課程では、国語総合において小・中学校課程から引き続いて「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が立てられ、小学校一年生から高校一年生（国語総合は多く一年生でおこなわれるが、二・三年生で選択する場合あり）にかけて、古典作品を教材とし、日本の伝統・文化に興味と理解を深め、日本理解（愛国心の育成もねらいか）と、国際化の中で日本の伝統・文化を海外へ発信していける力を養うことを求めているようである。

4．旧学習指導要領から新学習指導要領への移行の問題点

以上、小・中・高等学校課程それぞれの指導要領に示された古典授業や作品の扱い方をみてきた。新指導要領の内容自体への批判的論調もなくはないが、すでに施行が決まっている以上、内容を批判的に論じるよりも、小・中・

高の教育現場の現状と新指導要領の間にある現実的問題を論じるほうが妥当であろう。以下、稿者の考える問題点を指摘しておく。

まず、小学校課程での問題点を指摘する。小学校旧指導要領には古典の扱いに関する事項・項目がなく、古典作品を特に扱っていなかったために、小学生用の教材開発が進んでおらず、六年間で何をどのように積み上げていくかという手法も整っていない。「伝統的な言語文化」を体系的に学び、考えていくための導入部分である小学校で教材や手法が確立していない今、こどもはスタートからつまずくこととなり、その後の展開が見込めない。この点が問題である。これを解決しない限り、新指導要領の考える高等学校課程までの積み上げ学習による日本の伝統・文化の理解にはつながらない。

次に、中学校課程での問題点を指摘する。先に述べたように中学校の主眼は「古典を読み理解していくための基本・素養を身につけること」である。これを実践するためには、これまで中心をなしてきた作品単独の読解のみならず、時代背景や文学史なども含めた基本知識を定着させ、教養力を高めるための広がりのある授業が求められる。そこで問題となるのは、教師側の能力（近年、高校・大学生時代に古典をあまり学ばず、現代文学作品を中心に研究をおこなって先生となる場合も多い）の向上が望まれる。と同時に、国語科単独ではなく、他教科（社会・総合学習・家庭など）との連携授業も視野にいれなければ、より深い学習ができないであろう。

次に、高等学校課程での問題点を指摘する。高等学校での古典授業の現状は、厳しい。以前は、国語教育の大きな柱の一つをなしていた古典科目が今にも倒れそうな状況に直面している。例えば、高等学校の現状を見る限り、

受験科目の一つとして受験校ではその力を若干残しているものの、受験に必要としない生徒からは、嫌われ、敬遠され、無駄なものというひどい扱いをされている。受験科目としての古典も、アンケート結果からみると生徒から肯定的に受け入れられているわけではない。受験となるとどうしても授業の骨格が文法を覚えることと現代語訳をすることに中心が置かれ、古典のおもしろみ、世界観、当時の文化・風習・風俗など、古典作品から学ぶべき本来の事項まで手が回らず、ごっそりと抜け落ちてしまう。現状の受験偏重、現代文重視の中での古典授業では、新指導要領の目標を達成できるとは思えない。高等学校の古典A「我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」、古典B「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」の目標を達成することは難しいと思われる。やはり、生徒の古典離れ、古典敬遠が一番の問題であろう。

5．問題を解決するために何をすればよいのか

本稿2－3で述べたように、多くの生徒・学生は「古典から学ぶことの大切さ、重要さ」を語っている。それを知りながら、古典の授業を避けている生徒が多い。この現状に対してどう働きかけていけばいいのであろうか。どうすれば受験科目としての「古典」という位置づけからの脱出が図れるのであろうか。そこで、学習指導要領、教育現場の現状、アンケート結果を踏まえて、問題を解決するために特に何をすればいいのかを述べたい。

以下、1「小・中・高課程連携的視点」、2「各課程を中心とした視点」の二つの視点から考えを述べる。

5-1．小・中・高課程連携的視点

課程連携的視点に立った場合のキーとなるのは、新指導要領によって小学校課程から高等学校課程に至り新設された「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」である。本稿3節ですでに掲出はしているが、小学校課程から高等学校課程にかけてどのような表現の変化がみられるのか考えるために、今一度この事項のみを掲出する。

【小学校】

①「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」

②「やさしい文語調の短歌や俳句について、情景を浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」

③「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」

【中学校】

④「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」「古典には様々な種類の作品があることを知ること」

⑤「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」

⑥「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」

【高等学校】

⑦「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」「文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること」（国語総合）

⑧「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」（古典A）

⑨「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」（古典B）

傍線を引いた部分を中心に、課程連携的視点に立ち、稿者の解釈として再構築させると次のようになる（以下傍線は新指導要領の本文を引用、それ以外は、稿者が補ったもの）。

昔話のようなやさしく・親しみやすいものを教材とし、読み聞かせなどの手法も用いて、リズムを感じ取りながら音読や暗唱し、内容の大体を知ることを手始めとして、文語のきまりがあることも知り、古典の世界に触れることによって、様々な種類の作品があることを知り、その世界を楽しみ、親しむ態度を育てる。その上で、登

場人物や作者の思いなどを想像し、古典に関する簡単な文章（感想文や意見文）を書く力を養う。このことを基礎・基本として、現代語（口語）と比較することも視野に入れて文語のきまりを理解する。と同時に、国際化の流れの中で国際人として活躍するための一つの素養として、我が国の文化と外国の文化を比較しつつ我が国の伝統的な言語文化への興味・関心を広げることは重要なことである。そのためには、よりいっそう古典に親しむ態度を持ち、伝統と文化に対する理解を深めることが必要である。また、この活動を通してものの見方、感じ方、考え方を広くすることは、豊かな人生を送る契機ともなる。

この解釈は、あくまで稿者の理解によるものであるが、一般的理解から大きく外れた異端的解釈ではないと考える。この解釈を基本に考えるならば、小学校から高等学校までの十二年間で、「古典作品」を読むことを通して、広い視野から自国文化理解をした上で、他国文化理解の態度（比較文化的視点）を育てるまで視野に入れた古典教育を最終目標とすべきであろう。

これまでの古典教育、特に旧指導要領で古典の目標が定められていた高等学校では、極端な言い方をすれば、受験を目的とした現代語訳・内容把握のための文法・語彙力修得を中心とした暗記科目に陥っているという問題を抱えている。しかし、今後は、新指導要領により「古典」は、自国文化理解と国際人養成の素養をつけるための積み上げ学習の教科としての位置づけがなされたことにより、各課程だけの目標を考えるのではなく、全体の目標を見渡すことができるようになった。このことを国語科教員は意識した上で、こども・児童・生徒の将来を見据え、次

の課程（学年）に進ませるためには、自分の課程（学年）で何をしておくべきかを考えることが、暗記的授業に陥りやすい問題を解決し、よりよい古典授業を構築していく上で重要である。

また、この考え方は、表面的・事務的連携に陥りやすい幼少連携・小中連携・高大連携を実のあるものにしていく一つの方法であるともいえる。

5-2．各課程を中心とした視点

積み上げによる知識・能力の修得と向上のためには、全体を見渡し、今自分は何をすべきか（教員なら生徒に対して何をすべきか）を考えることが重要となる。しかし、教育現場の現状をみると、各課程のそれぞれに問題点がある。以下、稿者が特に気になる問題を指摘し、その解決の糸口を考えてみたい。

まず小学校課程では、旧指導要領により古典作品を扱う授業はほとんどなされなかった。そのために、教材や授業手法が確立していない。その解決のためには、新指導要領の一・二年生に「昔話や神話・伝承」と記されていることをもとに、神話教材の再検討、地元の民話や伝承の掘り起こしも含めた教材開発をおこなうことが必要であろう。と同時に、六年間を見据えた、課程内積み上げ的授業の構築とその手法の確立おこなうことも重要である。

次に中学校課程では、「古典を読み理解していくための基本・素養を身につけること」を主眼とするため、教員の能力向上のための研究・研修時間の確保と教科横断的授業の構築があげられる。しかし、教員は、授業外雑務の増加による授業準備時間の減少、生徒や親との関係構築の難しさ、教科指導内容の細分化など、厳しい現状にさら

され、研究・研修時間の確保はかなり難しいのである。これらの問題解決も視野にいれながら、授業内容の改善、質の向上・確保をするための方策を全学的おこなっていく必要がある。

次に高等学校課程の問題について。旧指導要領によっている現状では、小学校から高等学校に至る十二年間に古典の積み上げがないことによる古典に対する知識不足の上、文法・現代語訳中心の暗記科目の傾向が強くなっているために、古典軽視・古典離れが進み、その結果古典授業が崩壊しつつある。解決の糸口は、新指導要領の施行に合わせ、これまでの作品単発的な授業構成をやめ、小学校課程から高等学校課程にかけて全体を見渡した上での体系的・知識を積み上げ学習的授業をおこなえば、単なる受験科目としての古典には陥らないと考える。アンケート結果からみても生徒・学生は、決して古典は不要なものとはとらえていない。数値的にはむしろ我々に有用なものと位置づけている。生徒・学生は、古典作品を「今と昔の相違点に気付き、歴史の流れもわかり、伝統等にも触れることができる」もの、「さまざまな教えや、参考になることがたくさんある」ものととらえており、新指導要領の考えに限りなく近いのである。やるべきことは、授業内容の改善である。

ただ、このように述べても、現場教員としては、「実際問題として受験科目として古典があり、その内容が読解・文法中心なのだから、暗記的授業になるのはしかたない」という意見も出るであろう。稿者の高等学校教員の経験からいっても、実感としてこの発言を否定することはできない。新指導要領をよりよく施行するためには、大学入試の改善も必要となろう。

6．おわりに

本稿は、多くのことを提示したために全体的に煩雑なものとなってしまったが、積み上げ的、課程連携的古典授業の必要性は伝えられたと思う。

今や、これまでのように日本の技術力だけでなく、日本食、アニメ技術、刀剣や浮世絵など古美術品など日本文化に世界が注目する時代となった。今後、国際化がさらに進む中で、異文化交流もますます盛んになっていくことであろう。そのときに大切なことは、何よりもまず自国の歴史・伝統・文化を知ることである。自国の歴史・伝統・文化を知らずして、どのように異文化交流ができようか。特に、江戸時代末期鎖国を解くまでの日本独特の閉鎖的世界に生まれ培ってきた文化は、日本を端的に表す文化の一つであり、古典文学作品は、各時代の日本の純粋な文化を映す鏡といえる。古典作品とその時代を語ることもできなければ、日本文化を世界に発信したとはいえない。よって、古典文学作品から得られる知識は、国際社会の中で生きる上での日本人としてのアイデンティティーの確立に寄与するのみならず、日本文化を知ることは国際人として生きていく一つの武器となり、学ぶべきことが多いはずである。このことを念頭に置き、歴史・文化と密接に関わった古典、国際化に必要な知識としての古典という立場で、積み上げ的に体系的に授業が構成できれば、嫌われものの単なる受験科目としての「古典」からの脱出がはかれると考えるのである。

引用文献

【旧学習指導要領】

・小学校学習指導要領平成一〇年一二月告示・平成一五年一二月一部改正（文部科学省・国立印刷局）
・中学校学習指導要領平成一〇年一二月告示・平成一五年一二月一部改正（文部科学省・国立印刷局）
・高等学校学習指導要領平成一一年三月告示・平成一四年五月、一五年四月、同年一二月一部改正（文部科学省・国立印刷局）

【新学習指導要領】

・小学校学習指導要領平成二〇年三月告示（文部科学省）
・中学校学習指導要領平成二〇年三月告示（文部科学省）
・高等学校学習指導要領平成二一年三月告示（文部科学省・ホームページ http://www.mext.go.jp/）

参考文献

・府川源一郎　他著『日本文学協会編　日本文学講座12文学教育』大修館書店昭和六三（一九九八）年三月
・大平浩哉著『国語科教育改造論　次なる改訂への提言』愛育社平成一五（二〇〇三）年九月
・安彦忠彦監修『小学校学習指導要領の解説と展開国語編』教育出版平成二〇（二〇〇八）年八月
・国語教育研究所編『教育科学国語教育新学習指導要領国語科の長所短所』明治図書平成二〇（二〇〇八）年六月
・国語教育研究所編『教育科学国語教育移行期新国語科の授業改革に挑む』明治図書平成二〇（二〇〇八）年一〇月